VITANOVA

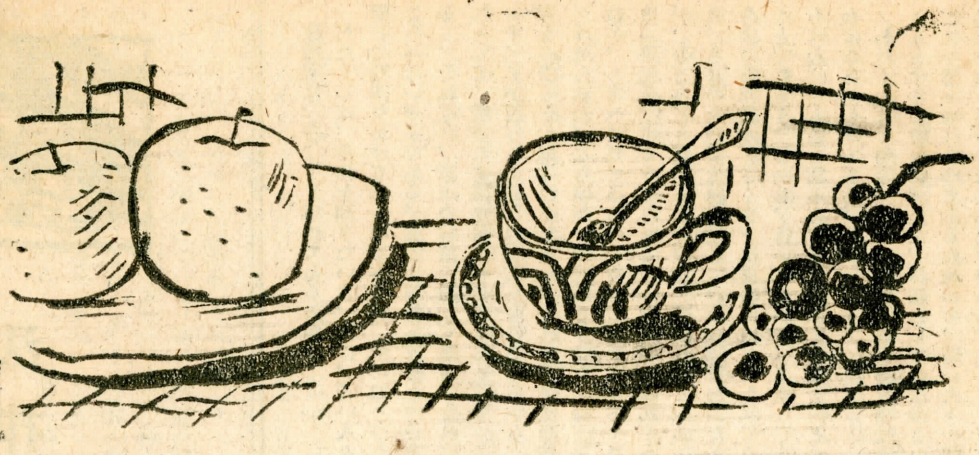
新生

1946

5

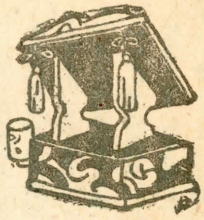
MAY

新生社発行



新生五月號目次

法律の襤褸をつゞる……牧野英一（二）
政黨の動向と國民の總意……細川嘉六（六）
吉野先生とその民主政治論……宮澤俊義（一）
失業と貧乏……大河内一男（三）
教育の地方化……中川善之助（八）
日ソ農村問題を語る―對談―……グドレワーティフ　中野重治（元）
民主主義と科學……岡邦雄（三）
自由の探究……林健太郎（五）
歴史と神秘……竹岡勝也（三）
グルウ大使と齋藤夫人……辰野隆（天）
終戰後の文學（文藝時評）……正宗白鳥（四一）
古朝太夫一夕話（三）……茶谷半次郎（四四）
罹災日錄（三）……永井荷風（四七）
（創作）青春期（三）……宇野浩二（五一）
雲のない空……久保田万太郎（五五）
よべの雨……室生犀星（五九）
▽編輯後記……（六四）



【藝談】

古靭太夫一夕話（その三）

茶谷半次郎

「堀川」について（一）

……お蔭で文樂座の再築も、ちよつとバラック建てとは見へないくらひ立派に出來上りました。總稽古の日に白井さんから、どこよりもさきに文樂座の再築に手をつけたことを悦んで貰ひたい、といはれましたが、全く有難く思つてをります。……二月一日初日で蓋を開けましたが、私の役は、またかと思はれるでせうが、また「堀川」なんです。はじめに「二月堂」といふ話だつたんですが、「良辨杉」（「三十三所觀音靈場記」の内。南都東大寺良辨杉由來」といふ外題は、上場の際古靭師がつけたもの。加古近女作、團平節付）は文章も餘りいゝといへないと聞いてゐますが、いつたいに筋も變化に乏しく、たゞ團平さんの節付だけで活きてゐる作ですので――出すなら「志賀の里」から通しで出して貰ひたい、「二月堂」だけでは、もうひとつ筋もとほらず淋しくもあるから、といつたもんで、それなら「堀川」をといふことになつたんです。つい先だつて會館で出したばかりなんですが、猿廻はしの「お猿は目出たや目出たやな」が御祝儀になるからといはれて、また引受けたやうなわけです。

……「堀川」といへば、去る一月三日の放送について、未知の方ですが、島根縣の松本さんといふ方から、讀んでみて下さい……こんな御批評の手紙がきてゐます。

（手紙の要點――紋下古靭師の斯道精進には兼て敬意を表してゐるが、斯界の學者と傳へらるゝ反面に、その技の物足らなさを實に遺憾に思ふ――一月三日夜の「堀川」を聽いて「ラヂオだからまあこれ位なところで」と意識して粗末にやられるほど藝術的良心に缺けてゐらるゝとは無論考へないが――老母は若く、與次郎また與次郎になりきれず、その上まだ氣が利いてゐるし、なんだかぎこちなくて、もちもちして聞き苦しい。もつとサラサラとならぬだらうか――大體に心の念の足らぬのは三味線も一緒――或ひはラヂオの時間といつたやうな都合であゝなつたとすれば、折角の立派な藝術を普及さする上から遺憾なことゝ思ふ――繰り返へしていはして貰ふならば、老母の若さ、與次郎の言葉共に、天性の聲が鶏ひする止むなさであるといへばそれ迄ながら、それはあきらめにあらずして修業の不足といひ得るのでなからうか――學者から離れてみて下さらないか――津太夫師の「なんと言葉も傳びようえ」を「傳べい」とやつてゐられるところは、さすがと頷かれた――。

表書きには古めかしくも「御靈文樂座、古靭師樣」とある。）

……私に筆が立つのでしたら直接返事を差上げるんですが、恰度この機會に、ひとつそれを書いておいて戴きませうか……。

第一に私は自分の技倆で「紋下」（番附右肩のはじめにある座元の紋所の下に名を載せるよりの謂。「檜下」と同じく座頭を意味する）になつてゐるとはけして思つてゐません。自分より上の人がだんだんにゐられなくなつたので、順番で「紋下」になつてゐるに過ぎないのです。

放送はこの方のお察しどほり時間の都合でだいぶんアチコチ抜きましたが、ゾンザイにやつたやうに誤解されたのは、院本の文章で私がやつてゐるからではないかと思ひます。――私は昭和二年十月の辨天座の假興行の時から、古きに還へす、といふ考へから「堀川」は、五行本と院本の文章の違ふところは大體院本に據つてやつてゐます。元のまゝの院本の文章の方が、いつたいに簡潔で、五行本にはあとで入れた院本にない入れ言が多いのです。從來ほかの人のやる「堀川」を聽き馴れてゐられるので、そんな風に思はれたのでないでせうか……。たとへば五行本の「琴三味線の指南屋も」も院本には「の」がありません。「お鶴さんさぞ待遠にあらふな」も「さぞ」がなく、「ニよりあの面白さを見る時は、詞イエイエそれではとんと聲にしほれがないはいな」は「――見る時は、イエイエしほれがない」とだけになつてゐます。……五行本と院本の違つてゐるところを、あとでひとゝほり書き拔いてお目

にかけませう。

與次郎は正直一遍の人間を現はす、といふつもりでやつてをります。臆病者ではあつても、剽輕でも阿呆でも決してない。從來のやうにチャリがゝつてなどやるべきでない。さう解釋して、どこまでも眞面目でゆくやうに心がけてゐます。……と申したところで、與次郎のその性根を現はすといひましても、なにしろ私どもではたゞ聲だけの仕事なんですから、どこまでそれがやれてゐますやら、これはやり憎い、全くはあまりやりたくないものなんです。

老母が若い、とありますが、これはラヂオの調子といふこともあると思ひます。この淨瑠璃では老母が「シテ」、心を入れて大事にやつてゐるつもりです。未熟といはれゝばそれまでゞすが、私としては別段に申すことはありません。

もつとサラサラやれ、といふことですが、私もこの淨瑠璃は出來るだけサラサラやりたいんです。もうすんだのか……と思つて戴くほどにやりたいといふ念願をもつてゐるのです。

……聽く耳のよしあし、やる方にもその時の體の調子といふこともありますので、御批評に對しても一概になんとも申されません。……燒いて仕舞ひましたが、若い頃からずいぶん糞味噌に遣つつけられた手紙を貰つてゐますが、勉强になると思つて皆切拔帳に貼つて保存してをりました。かうした御手紙には、嘘でなくお禮がいひたい氣持がいたします。

……御承知のやうに「堀川」は、三味線は至つて派手に出來てゐますが、この淨瑠璃の文章を讀めば、同じやうに賑やかに語れるやうなものでない筈に思はれます。三味線は派手でも、私は出來るだけ寂しい、しんみりした氣分に語ることに苦心してをります。……やれもしないことに無駄な苦心をして、けつく中途半端なものが出來あがつてゐるわけかも知れません。が、どつちにしても私の「堀川」は、お聽さになつて面白いものではないだらうと思ひます。……

（――文句を還元しても、從來のやうな語り口を、古靱が採つてゐるとするならば――即ち呆氣な與次郎を、丸本への還元を行うて、尙且つ與次郎の性根を從來の如く語るとすれば、ソコに矛盾があつたらうが、古靱は內面的にも、與次郎の解釋を丸本に準據して、その性格を語らうとしてゐる――「アヽコレ母者人、ソリヤ何をいはんすぞいの、其やうにみたやかなしんだいじやと思はしやるか……」の條りで、古靱の與次郎は、道化などは塵ほどもなく、涙の浸むやうな心持で母者人を慰めやうとする。その眞實が聽者にヒシヒシと胸を打つた――今度の「堀川」に、立派な人間味を與次郎に聽いた事は確かだと言ひ切る事が出來る。――石割松太郎氏「古靱太夫『堀川』の解釋」より、昭和五年五月「演藝月刊」所載――）

「堀川」について（二）

……近頃は世話物ばかりやらされてゐますが、どうらかいへば私は極りのきつちりした、グツと突込んでやれる時代物の方が好きなんです。時代物ばかりやつてゐると、たいてい太夫はからだを毀します。その點は世話物はらくなんですけれど、口捌きのわるい私には世話物は全くは柄にないのです。

……まへにも申しましたが、「堀川」は三味線は華やかな手が付いてゐますが、語る方は、打沈んだ、寂しい語り口をとるべきものと思ひます。侘しい暮らしをする親子兄妹の、親味の情愛を語るのが、この一段の主旨であると心得ます。……世話物は話をするやうに語れ、といはれてゐます。――「今戻つたぞや」「オヽ兄戻りやつたか」この呼吸でサラサラとゆきたいのです。なかには、なアにもともと狂言綺語ちやないかといはれる方もあります。人形遣ひからも「堀川」とあんなもんやあれへん、と蔭でいはれてもきましたが、私はなるたけ地味に、寫實の情でゆくやうに心がけてゐます。……「堀川」を語る心持としましては、だいたい申し上げることはそれに盡きるのです。

……マクラの「おなじ都も世につれて、田舍がましの薄煙、堀川邊に住居して」の「田舍がまし」を普通に「田舍が增」と讀んでゐるやうですが、私はこれは「田舍、がまし」であると解してゐます。それで、

ヘいなかがア――合テンツン、テレレンレンレン、ヤまアしの、

と皆やつてゐますが、私は、

ヘいなかア――がましの（チテン、テツテツツトン、ツツントン）

とやつてゐます。

……二上り唄は、これは齒八節を取つたものですが、「お前は女の方、お繁さんは男の方――お繁さんのかはりに私と掛合にうたひませう」とあつて、稽古娘のおつると母親との掛合ひになつてゐます。「女肌には白無垢や、上ぎ紫藤の紋、中着緋紗綾に黑繻子の帶、年は十七初花ゝ、雨にしほるゝ立姿」までをおつる、「男も肌は白小袖にて、黑き綸子に、色淺黃裏、二十一期の色盛りをば」を母親「戀といふ字に身を捨小舟」をおつる、「どこへ取つく島とてもなし」を母親「島邊の山はそなだぞと」をおつる、「死に行く身の後髮」を母親「彈く三味線は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に、亂れて遊ぶ騷ぎ合ひ、あの面白さを見る時は」をおつる、のつもりで、だいたいやつてゐます。「染どのそなたと――」からあとは、二人の聲を一しよにやるわけにもゆきませんし、母親でやつてゐます。

……「母者人、母者人、今戻つたぞや」で、母親は眼が見へないんですから、耳を立てるこゝろで、ちよ

ッと間をおいて「オヽ、見、戻りやつたか」とやります。

「塩そひもじかろ、茶も湧いてある、膳もそこにして置いた」で、猿が傍へくるのを手さぐりで知つたこゝろで、氣を替へて「オヽ、德よ、今戻つたか」とやつてゐます。そのあとの「イヤノヲ與次郎、そなたが孝行にしてたもるにつけ」からの母親の愚痴もさうですが、こゝは濕つてやりますが、當て込んだりしなこで、なるだけサラッと運ぶやうにしてゐます。……「つれなの老の命やと、身を悔みたるむせび泣き、哀れにも又いぢらしゝ」で三味線がジャンと彈いてから、すぐに「アヽ、コレ母者人」とつゞけずに、ちよつと間をおくやうに私はしてゐます。母親の愁歎に誘ひ込まれて、ともども與次郎も肚では泣いてゐたので、すぐに言葉が接げぬといふこゝろで、さうやつてゐます。……與次郎が母親を慰める言葉のなかの「それに、まだ……まだ……」は、そこまで竝べ立てた氣安めの嘘が種切れになつて、ほかに何がなと搜し案じて、あとをいひ澁つてゐる氣味合ひでやり、そこでフッと家主のことを思ひついたこゝろで、氣を替へて、あと勢ひよく「ヤ、まだ、まだ、まだ——」とつゞけます。

「嘘八百さへ一貫に、足らぬ節期の事譯を、云ふ下稽古やこれなるべし」の「下稽古」を、たいてい、

〃いふした、合ポトテン、げいこや、

と「した」で切つてやつてゐますが、私は、三味線は同じですが、

〃いふしたア——げいこや、

とつゞけてやつてゐます。「下稽古」といふ文句なんですからね……。鬼の、傳兵衞がお俊と取違へられて門へ引込まれ、與次郎が退き狀といふのを誠と思ふてお俊を恨むところの、お俊の「恨みを聞くも隔たる戸口、心はさうじやないぢやくり」も、「さうぢやない」と「ないじやくり」の掛け文句を、たいていは、

〃こゝろはさうぢや、合チチチン、ないじやくり、

とやつてゐますが、私は、これも三味線は一しよですが「ない」の「い」でゆりをつけて、

〃こゝろはさうぢやないィ——じやくり、

とつゞけていつて仕舞ひます。さうやらないと掛文句の兩方の意味が通じないと思ひます。……ひとさんの捨てゝゐるやうなところでも、私は拾つてゆきたいのです。

……「ドレ灯を燈そと棚のすみ、こてこて取出す行燈の、灯かげも洩るゝ暖簾ごし、お俊……お俊……」のところの「灯かげも」の「もオ——」の節尻が「ギン」になつてゐるところをみますと、この淨瑠璃は四段目風に節付されてゐるやうにも思はれます。

お俊が本心をつゝんで「ことに又傳兵衞さん、ツイひと通りで逢ふれ答、深い譯でもないはいなア、しかし勤めのならひにて、人の落目を見捨を、里の恥辱とするはいな、とても末の詰らぬこと、わしや得心をさせまして、品やう譯の立ように」といふところは半太夫の「サラリ」で、半太夫節を取入れた節と足取りになつてゐます。

（義太夫節以外の節から節調を取入れたところを「サラリ」といふ。即ち「觸はり」の意。俗に「サラリ」といはれるところは「クドキ」といふを正しいとする）

……お俊の「クドキ」は、派手に唄つて皆が實りたがるところですが、私はやはり捉どほり地味に、間の延びないやう足取りに氣をつけてやつてゐます。

……そのあとの「詞ノリ」になつてゐる母親の「クドキ」——「オヽ、さうぢや、我子が可愛い可愛いと、子の可愛さに脇ひら見ず」から「可愛我子を心中に、含點してやる親心、爰の道理を聞分けて、コヽ拜ます頼みますと、手を合はしたる母親の、子故に迷ふ闇と闇」までを、私はこの一段の眼目に置いて心を入れて語つてゐます。何度も申しますが、なんといつても、この淨瑠璃では母親がシテ、わけてこのクドキを私はギュッと握つて離さないやうにしてゐます。……なくなつた石割さんが、こゝの「娘の手前面目ない」で遮かして貰ひたい、と私に注文をつけてゐられましたが、こゝの節廻はしで前受けをやつて、手をたゝかせるといふ以てのほかの太夫もありました。……私はこの「クドキ」は、じゆうぶんに打ち濕つて、眼の盲ひた母親の一旦は諦めながらも、恩愛の斷ちきれぬ哀れな心根を、沁々語り生かすことに努めてゐます。打割つて申せば、私は母親を樂しみに、いつも「堀川」をやるんです。

……「猿廻はし」からは三味線に渡してサラサラと語ります。もつとも間に氣をつけて、息を抜いてならないことは、いふまでもありませんが……。

役不足をいつたこと

……どうも藝談といふものは、けつく自慢咄に落ちてゐるのが多いやうに見受けますが、これもそれに當るやうでしたら書かないで下さい。自分では懺悔咄のつもりなんですが、どうでせう……。

私どもの方では、

顏爭ひをするな。爭ふ方が下、爭ふて貰ふやうな太夫になれ。

役不足をいふな。惡い役を面白くやるやうに勉强せよ。

給金のことをいふな。藝がよくなれば自然仕打からくれる。

といふ古くからの誡めがあるのですが、それに背いて私が役不足をいつて、師匠がたに氣を揉ましたことが一度ありました。

……大正四年の正月、文樂座の中狂言が「鶴山古跡松」の三段目「中將姫雪責之段」でしたが、「口」がつて「中」が私「切」が南部太夫（三代目。前名鶴屋太夫）と役割が決まつたと聞くと、どうにも私は氣持が納まらなくなつてくるのでした。

（つづく）